

# 昭和を生きたお転婆娘

（ある女教師の生涯）

相羽 伊佐子 著

## はじめに

世の中が軍国主義になる頃、「産めよ増やせよ」の時代、暮らしは貧富の差（士農工商）がはっきりしていた。（江戸時代、明治時代と何の変わりも無い）

世間は誰もが貧乏人の子沢山であった。著者の家庭も十人の子供がひしめいていた。その中の六人目の子としてこの世に生を受けた。

波乱万丈の昭和の時代の中で、自分の思いを貫いてきた私の人生を、一人でも多くの人に知って欲しい。

また、「**為せば成る、為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり**」この精神を貫いた一人の女性史を残したいと思い、八十歳を記念して書述した。

平成二十一年

相羽 伊佐子



生まれ故郷の渥美半島 恋路が浜にて

はじめに…………… 1

一、誕生 — 田原町 大久保 —…………… 5

二、幼児時代 — 赤羽根村 高松 若見 —…………… 7

一、妹の子守り…………… 7

二、遊びと地引き綱…………… 7

三、水泳…………… 9

三、小学生時代…………… 10

一、若戸尋常小学校 入学式…………… 10

二、勉強…………… 10

三、朝の出席と検査…………… 11

四、神戸尋常小学校…………… 12

五、泉村 泉尋常小学校…………… 13

六、学校行事…………… 15

七、農繁期だけの託児所…………… 16

八、運動（郡の競技大会）	16
九、義務教育 卒業式	17
四、女学校時代（昭和十七年三月）	18
一、勉強と戦争	18
二、学徒動員	18
三、父と別れる日	19
四、面接と実技	20
五、師範学校へ（電車通勤）	20
五、青春時代	21
六、新任女教師誕生	22
一、初日	22
二、始業式	22
三、空襲と終戦	24
四、新教育発足（昭和二十年九月）	25

五、戦争孤児と食糧難	(昭和二十二年～二十四年)	25
六、社会科学習指定校となる	(昭和二十四年～二十五年)	27
七、戦後初めての修学旅行		27
八、夏休み返上		28
九、いろいろな行事		28
十、矢作東小学校	(昭和二十八年四月～三十五年三月)	29
七、結婚		30
編集後記		32
参考資料・写真集		38

## 一、誕生 ― 田原町 大久保 ―

昭和三年十二月十一日、父・都築浅次郎（警察官）、母・すぎの第六子としてこのよ今世に生まれた。母の話によると、少しでも食べ物を収穫しようと思い、慣れない畑仕事をしていた。九ヶ月目に入った妊婦の母は、破水した。産婆さんが来た時は、もう産まれかけていた。小さな姉は湯をわかす、短い時間で産婆さんがとりあげた。弱々しい産声で泣いた、小さな小さな女の子は、産婆さん手の中で手足を動かしていた。（体重四百もんめ匁、今の約千六百グラム）

「心臓は元気に動いている、何とか生きてほしい」

産婆さんと家族は一生懸命冬の寒さから守るため、湯たんぽを入れた。しかし身体があまりにも小さいので布団は浮き上がり、冷たい空気が通り抜ける。

「これじゃあ駄目だ、ビール瓶がいい」

胴体の両脇に瓶を入れ、やっと暖をとることができた。産婆さんは、

「一晩中目を放さないように、朝まで息をしていたら助かるよ」

と言って帰って行った。眠らないで世話をした。夜明けだ、生きている。用意しておいた重湯を口に含ませると、力強く吸った。

「よかった、生きている、助かった」

みんなやっと笑顔になった。

「昔から、八ヶ月子は育つが九ヶ月子は滅多に育たないと言われているが、この子の生命力はすごい、大事に育ててください」

「ありがとうございました」

それから両親は、一歳半になる兄をほったらかしにして、私を中心に育てた。六ヶ月を過ぎた時、産婆さんが

「もう大丈夫、体重も身長もちよつと小さいが、普通の子と変わらない子になった。奥さん、もう大丈夫です、よく頑張りましたね。」と、毎月見に来てくれた。

こうして、多くの姉妹、父母の愛に恵まれ「伊佐子」と命名され、走り回り遊び廻り、自分の思うまま楽天的な明るい元気な子になった。

## 二、幼児時代

— 赤羽根村 高松 若見 —

### 一、妹の子守り

父の職業は、三年（最長）で必ず転勤がある。昭和五年九月一日、赤羽根村高松で弟が生まれ、昭和七年十一月十日には赤羽根村岩見で妹が生まれた。お転婆の女の子は四歳になると、毎日午前中は妹を背中におんぶし、柱に蟬のようにつかまって

「お母さん、まだあ？」

背中で妹は泣く、しつこが出たのかお腹が空いたのか。

「まだだよ、あと一回すすいで干したらね。頑張つて柱にもたれててね。」

母はたくさんを着物とおむつを洗っている。二時間余り立っているので手も足も肩も疲れる。手を放すと私が仰向けに倒れてしまうからだ。やっと子守りから解放されると、おやつに森永の大きなビスケットを二枚ずつもらえた。

「えらかったね、よく頑張った」

と頭をなでくれた。

### 二、遊びと地引き網

妹が一人遊びができるようになって、自由に遊べる。この頃の田舎では、女の子は畑や家の中でお手伝いをし、遊ぶのは男の子ばかりだったが、お転婆の私の友達と言えば男の子ばかり。山を駆け回ったり海へ出て波とかけっこしていた。網元の新ちゃんが夜明けになると



「オーイ、伊公（私のあだ名）、船が出るよ」

と呼びに来る。二階の窓から身軽に飛び降り、走って浜辺へ行く。網元のおじさんと男衆が手を引っ張って船上へ。船は丸太の上を滑るように海に入り、上手く波に乗り沖へ向かう。魚の通り道に網をおろす。しばらくすると昼食が出る。船の上で男衆と円を作り

「大漁だといいな」

と、にぎやかに過ごす。一時頃船は帰って来る。浜辺では大漁の旗が振られる。すると村中の男も女も子供もみんなそれぞれ籠を持って集まる。牛が綱を引くと村人は綱引きのように綱づなを持って、牛に合わせ

「エンヤコラ、ソーレ、エンヤコラ」

と力一杯引く。網目がだんだん細かくなると、大きな魚やいろいろな魚が引っかかってくる。先端が波打ち際の白砂に着くと、みんな大喜びで黒山ばかり。男衆が持っている籠に適当に分けてくれる。

「お母さん、今日の収穫だよ。」

「ほう、よく働くね」

とか、

「よく遊ぶね、真っ黒になって」

獲れた魚は、煮たり焼いたり干したりする。鰯は煮てすり鉢ですりおろし、昆布やにんじんなどの野菜を入れて鰯玉にする。夕食は家族揃って腹一杯食べる。五歳の私は、子守りより地引き網の方が楽しかった。太平洋の黒潮でたくましく育った「我は海の子」である。

健康で丈夫な心と身体に育った。楽しくてたくましい男の子のような明るい社会性のある子に育ったのである。

### 三、水泳

長男は十歳年上で、父親よりも恐かった。その兄は刈谷高等学校の五年生で、夏休みになると下宿から帰って来る。

「ほら、兄ちゃんが来た」

の母の声でみんなあわてて履物を揃え、正座をして

「お兄ちゃん、おかえり」

とあいさつする。

「お母さんの言うことを聞いて、よい子にしていたか」

みんなは揃ってうなづく。

兄は、天気の良い日には必ず浜に出て泳ぎを教えてくれた。洗濯板を抱えて素足で走り海へ。まず波抜け、次に立ち泳ぎ、平泳ぎと丁寧に教えてくれる。他の兄弟は海の波が恐くてやめてしまったが、私だけは兄について行き、夏休み中に波抜けができるようになり、沖の方まで泳げるようになった。洗濯板を持ち出すたびに母に叱られていた。

保育園も幼稚園もない時代、机も一つしかなかったので、遊びも勉強もみかん箱を並べ仲良く助け合って過ごした。

### 三、小学生時代

#### 一、若戸尋常小学校 入学式

姉のおさがりの矢がすりの着物を着て小豆色の衿姿、男子は縞模様の筒袖にやはり白と黒の縦縞の衿（ちょうど今の七五三の様姿）で、まじめな顔が一行に並び、日の丸と両陛下の写真が正面に掲げられた講堂に全校児童が入場して、村長、村会議員、役場の人、駐在所のおまわりさん、校長先生はじめ諸先生方など、いろいろな人がお祝いの言葉を話し、立ったり座ったり、咳払い一つもできない静かな式が終わる。担任の先生と初めての教室、注文した本をいただき下校。この時、紅白の祝まんじゅうを一組ずつもらった。

#### 二、勉強

机は二人で一つ、真ん中に仕切りがある。

「男女七歳にして席を同じくするな」

との古来からのしきたりで、男子組と女子組に分かれている。私の学校は

「修身し校長先生が教える」

後はほとんど担任の先生、教科書は読本、算術、唱歌、図画、習字、作文で、どの教科書も兄弟が使った本を順々に下げて使う。私はいつも古本であった。名前だけ書き換える。それでも嬉しくて風呂敷に包み背中に肩から背負って出かける。

「行ってきます。」

「先生の言うことをよく聞くだよ。」

「はい」

三人で手をつないで毎日休まず登校する。みんなニコニコ顔が集まっていた。新品の本の子がうらやましかった。

### 三、朝の出席と検査

返事、顔洗い、手足の爪、鼻紙、手ふき、頭髪。教室の後ろに表があり、合格の人は○、注意をされたら×をつける。私は毎日頭髪は×であった。理由はお釈迦様のようなすごい「ちんじゅう(ちぢれ毛)」で、熱い湯で濡らしてきちんとして行っても、学校へ着く頃にはぼうぼう。顔は毎日海で遊んでいたので真っ黒。まるで男の子。友達にはこう言われた。

「オイ、男女のちんちろ毛」

「インド人か」

上級生にもいじめられた。永田という女の裁縫の先生にも

「お姉さんと雲泥の差、本当のことを言いなさい」と叱られた。

「本当だよ、直せるなら先生が直してくれたら」

と反発したほどのえらまつ(威張っていること)だった。とうとう母が話し合いに出向き一件落着。それから頭髪のこと顔のこととも言われなくなり、楽しい毎日だった。いつの間にかクラスの女大将となった。

#### 四、神戸尋常小学校

三年生の二学期、運動会後の十月十九日、神戸村立神戸小学校へ転校し、いきなり学級代表で学校紅白リレーの選手になった。

「あの子は小さいのにすごく速い」

「走れ走れ黒ん坊」

そんな声は耳に入らない。四番だった私はバトンを渡したときには二番になっていた。アンカーが頑張って一等になった。運動会が終わり教室に入ると、

「あの子、転校生なんだって」

学校中の人が黒山ばかり。窓も廊下も顔だらけ。この頃は転校生なんてめったになかった。姉も兄も運動会に参加しないのに、私は平気でもう友達ができた。学校から帰ると近所の子が

「遊ぼう」

と誘いに来た。姉達は引越し後の手伝いをしているのに、そんなことはおかまいなく、竹の棒を振り回し野山を走り回り戦争ごっこをして遊び呆けていた。母に叱られた。ほうきで思いきり背中をぶたれた。

楽しいことばかりではなかった。学習や運動ではほとんど叱られなかったが、頭髪と顔、みだしなみについては、褒められたことがなかった。パーマをかけているとか、顔を洗ってこないとか、巡査の家の子なのに嘘をついて反発するとか先生に言われた。気にしないようにしていたが、ついに母に話し、頭髪は天然であること、顔も兄弟順番に毎日洗っていることを説明してもらった。

「もう少し女の子らしくするように」

と言われ、それから先生は何も言わなくなった。相変わらず大声を出して遊んでばかりの男女であった。

## 五、泉村 泉尋常小学校

五年生の二学期に泉尋常小学校へ転校した。初登校の日、姉高等科二年生、兄六年生、私五年生、弟三年生、妹一年生。母は姉や弟たち三人と一緒に家を出たが、私は待ちきれず一人で先に学校へ行き、トントン、さっさと校長室に入った。校長先生は驚いた顔をしていた。

「あなたは誰ですか？」

「はい、今日から転校して来た江比間駐在所の都築伊佐子、三年生です」

「ああ、そう、一人ですか。」

「いいえ、後から母と兄弟三人来ます」

と言ってペコンと頭を下げた。

「ほう、元気がいいね」

ニコニコして

「まあ、ここへ座りなさい」

と言って立派な椅子を出してくれ、褒められた。しばらくすると母達が来た。校長先生はそれぞれ担任の先生を呼んでくれ、あいさつを交わした。その日はまた運動会だった。神戸小で運動会をして来たのにまた運動会だった。担任の鈴木錦承先生が

「徒競走くらいは出来るから出ますか？」

「はい。」

と言うと、特別に列に加えてくれた。徒競走は大得意だったのでニコニコしていた。同級生の子はチラッと私を見て変な顔をしていた。

いきなり一等になり、鉛筆三本とノートをもらった。父は来賓席で八の字髭をなぜ、ニコニコして拍手した。運動会が終わり、字別下校の時、

「オイ、トーチカ心臓のお前、速いなあ、片方の足が地に着かないのに、もう片方の足が地から離れて、まるで空を走っていたぞ。なあ、みんな。」

と昭ちゃんが言うと、みんなが

「そうだ、そうだ。」

と言って、人気者になった初日だった。他の兄弟はおとなしく行儀の良い子で、運動会は観ていただけだった。

この学校は大きい方で、三年生から六年生までの一学年が四クラスあった。男子組、女子組であった。私たちの学年は放課になると入り混じってよく男子と遊んだ。私はいつの間にか遊び仲間の『ワシントン大将』にされ、先頭になって手つなぎ鬼ごっこ、鉄棒、ろくぼく乗りをした。家に帰ると

「ただいまー」

と言ってカバンを上がり端に放り投げ、母が手伝いを頼む

「ちよっとー」

と言う声を背中の方で聞き、日暮れまで遊び呆けていた。宿題なんて一度も家でしたことはなかった。次の朝、登校して叱られないように慌ててやり、すまし顔で過ごしていた。ある日、間に合わなくて

「奉安殿の前で正座しておれ！」

と、一時間、足の痛いのを我慢していた。兄や姉がそれを見ていて母に話した。

「妹は今日も座っていた、恥ずかしくて・・・」

と言いつけられたので、私は母にすぐ叱られ、背中をほうきで思い切り叩かれた。息ができない程の力であった。それから宿題だけは兄弟と一緒にするようになった。でも、路地で遊ぶことはやめなかった。遊んでいるのは男の子ばかり。何のくったくもなく、ボールが見えなくなる夕方まで遊んだ。楽しい時代を過ごした。

## 六、学校行事

だんだん戦争が激しくなり、日本には二十歳以上の男子は、父も兄も赤紙一枚で戦争に駆り出され、農業をする人は年寄りと婦女子ばかりであった。六月と九月になると学校は二週間休みになり、農家ではない家の子は手伝いに行く。

・まゆあげ：お蚕さんを手でつかみ、桑柵から藁柵に移す仕事。虫が嫌いで恐い私にはどうしてもできなかった。

・田植え：ひいるが手足に吸い付くので、これも大声をあげて畦を逃げ回った。

また叱られて落第生。とうとうお寺へ回された。



## 七、農繁期だけの託児所

お寺では、就学前の子を預かって子守りのような事をしている。小児はお寺の奥様がみて、三歳以上の子は和尚さんや私のような人が面倒をみる。遊んだりオルガンを囲んで歌ったり踊ったりする。幸い私はオルガンやハーモニカができたので、とても喜ばれ、重宝がられ、ずーっと使ってもらえた。お寺では

「いい子が来てくれた、大助かりだ」

と言って、農繁期の手伝い落第生の私は毎回使ってもらえた。私はいつの間にか託児所の先生になりきっていた。おしゃべり好きで、いろいろな話をしたり、昔話の紙芝居を声色を変えてやったりした。子供たちは喜んで

「お姉ちゃん、また明日も来てね」

と言った。和尚さんには毎日名指しで頼まれた。イモムシのような蚕、吸血鬼のようなひいる、桑畑の毛虫から解放され、苦痛だった農繁期が大好きになった。

## 八、運動（郡の競技大会）

渥美半島の各学校から二～三人の子が選抜され、一番大きな田原中央小学校に集合して賞を競う大会があった。短距離走、走り幅跳び、棒高跳び、水泳（プールがないので海で行った）を、学校の講堂での三日間の合宿で行った。私は短距離は百メートル13.8秒、走り幅跳び1.35メートル、棒高跳び3.85メートル、鉄棒前周り百三十回、足掛け後ろ周り九十四回、水泳（平泳ぎ）は六歳の

頃から兄（長男）に仕込まれていたおかげで、三丁一位、十丁一位、総合一位で郡一位になり、学校の有名人になった。

## 九、義務教育 卒業式

お転婆娘の私も一応羽織袴のしとやかな女の子。六年間皆勤賞、学年で二人、賞状を受け取った。学力賞は二等賞、習字道具一式と辞書をもらった。でも両親はもう一年高等科に行き、女らしくなったら姉のように女学校へ行かせてやる、お転婆が治ったらと約束させられ、高等科へ何とか行かせてもらえた。しかし、親の思惑通りにならず、長男の勧めで花嫁修業の学校へ何とか編入させてもらった。

女学校は豊橋市まで行かないと無い時代で、通学はできない。寄宿舎代と月謝、小遣いで最低十円は必要である。父の月給では当然行けない。最初から長子から三人までは親が学資を出す、後の子は長男が世話をするという風に決められていた。航空機将校は、月給二百五十円であった。姉、兄、私と、毎月三十円送ってくれた。私の月謝四円、寄宿料四円、小遣い二円、兄のお陰で学校へ行けるのだから、当然、何事も一生懸命しなければ人間として駄目な人となる。

## 四、女学校時代

(昭和十七年四月)

### 一、勉強と戦争

入学して七月までは学習一筋であった。二学期になると「英語」は教科書を取り上げられ、ABC「音楽」も軍歌ばかり。学校祭も修学旅行もなくなり、戦争色に変わった。

### 二、学徒動員 (昭和十七年九月)

豊橋、田原の学校は、三年生、四年生は農家の勤労奉仕と豊川海軍工廠（こうしょう）のどちらかを選択して、希望するところへ派遣された。戦争はますます激しくなり、毎日のようにB29の空襲がある。サイレンが鳴ると、防空頭巾をかぶり防空壕へ入る。私のクラスは機銃機工場で機関銃の玉を製作する。学徒動員の人は日の丸の鉢巻を頭にしっかり結び、勇ましい姿で工場へ通った。短剣を下げた海軍将校監督の下で働いた。幸い学業成績が良好だったので工場内の一部屋で事務員をしていた。油だらけにならず、机の前で書類を書いたり整理をしたりしていた。

校長先生と担任の先生が面会にみえた。

「学校の先生が兵隊で出勤して先生が足りない。各女学校から選抜で岡崎師範学校へ行くよう手続きを取ったから、明日、自宅へ帰って親に伝えて来なさい。」

と言われた。理由は、各教科、特に児童心理学、教育学が優れている、態度が先生に適している、その上、運動能力優秀。この時代は、全教科制であった。

三、父と別れる日（昭和十八年二月）

「明日から岡崎師範学校教員養成所へ行くので、豊橋の寄宿舎にある荷物を、富士松の伯母さんの家に送ってほしい。」と挨拶すると、

「駄目だ。」

といきなり怒鳴られた。

「男子でさえ、親が職業を決めるのに、女の子が何の前ぶれもなく勝手に自分の生き方を決めて、何も言えない状態、何事だ！ そんな不良者は家の子ではない、自分の意志を通すのなら、この家からすぐに出て行け、勘当だ、二度と顔を見せるな。」

と言われた。私はうなだれて、悲しさと悔しさと涙がポトポトと落ちた。母は座っているだけで何も言ってくれない。気が強く、一度口に出したことは曲げられない性格である。

「今まで、兄弟の何倍も世話になり、親不孝のかけつぱなしで すみません。ありがとうございました。出て行きます。」

と、深々と頭を下げ、風呂敷に着替えなどを包み家を出た。母は家の中をウロウロ歩いていた。父は背中を向け、座ったまま無言であった。肩が少し震えて見えた。私は手荷物を持って田舎道をトボトボ歩いて田原の駅に向かった。夕日の影が長く続いていた。何事もなかった顔をして寄宿舎に帰り館長さんに挨拶をし、一人で布団袋に自分の柳こうりと寝具を詰め、豊橋の駅から富士松今川の伯母の家を送り、初めて名古屋行きの名鉄電車（普通）に乗り、一人旅をした。

夕方伯母の家に着くと、

「よう、一人で来れた、偉かったね。」

と迎え入れてくれた。一週間後、母は何とも言えない顔をして伯父と伯母の前に座り、頭を下げて何やら話をしていて、一晩泊まって母は帰って行った。

#### 四、面接と実技（昭和十八年二月）

お転婆娘も真面目な顔で行儀良く、返事も話もはきはき答えた。2日目はピアノの演奏である。何処へも習いに行った事もなく、運動ばかりしていた私は、小学校の勤労奉仕でのお寺の託児所のことを思い出し、何とか小学生唱歌「スキー」を選曲し落ち着いて引いた。試験管の永見貞三先生が

「独学での演奏にはなかなか良いでしょう、合格とします。」  
と言われた。

#### 五、師範学校へ（電車通勤）

昭和十八年4月から通学が始まった。戦争はますますエスカレートして毎日のように空襲があった。校庭の防空壕に何度入ったり出たりしたことか。その度に壕の中でじっとしていた。半分位の学習しか受けられなかったが、一応二年間の学習を終え、全教科の単位をしっかりと修得し卒業する。小学校訓導一級の免許証をもらい、「辞令 碧海郡知立町立知立国民学校勤務ヲ命ズ」の証書を受け取る。

## 五、青春時代

食糧難と空襲と地震、衣料品も配給で一人二十点、服はモンペと筒袖。一着作ると一年分の点数はおしまい。食糧は一日米五勺（一合の半分）ご飯にすると茶碗に一杯。あとは芋切干、大根切干は良い方で、豆かす入りご飯、あとは一食トマト中位一個とか、ジャガイモ小二個、副食はスイトン（団子汁）一杯、今では想像できない食事である。若い男子はみんな出征兵士として戦場へ。学徒動員でそれぞれの工場で働く。生きるに精一杯で「青春」なんて言葉すら知らずに過ごした。

## 六、新任女教師誕生（昭和二十年三月三十一日）

### 一、初日

八百屋の伯父さんは、紋付、羽織、袴姿で白足袋、雪駄で勇んで私を連れ、辞令書を持って知立国民学校へ出向いた。私は、まるで生徒のように緊張した顔で校門をくぐり、校長室へ入った。校長先生を待っていると、扉が開いて校長先生が入ってみえた。顔を上げるとなんと、隣組の大家さん「塚本稔」と言う顔見知りの人であった。私は思わず笑顔になり、伯父さんも私も安心した。今日は線職員だけで新任の紹介と挨拶と学年担任の発表があり、入学式、始業式の準備をした。午後、職員会議をし、学年主任の先生の下で担任の名簿作りをし、氏名の読み方を教えてもらった。夕食会を終え、知らない先生の中ですごく疲れた初日が終わった。

### 二、始業式（昭和二十年四月二日）

「先生は始業三十分前に出勤すること」と言われていた。七時〇五分の電車に乗り、校長先生と一緒に学校へ行った。小使いさんが鉄板と釘で鳴らすと、生徒たちは廊下に貼り出してある名簿を見て並んで講堂に入っていく。校長室には校長はじめ、教頭、年高の先生が順序良く並んで式場へ行く。私はまるで転入生のように校長先生の横に直立不動の姿勢で立っていた。

「今日から赴任された新しい都築先生です。」

と紹介され、全校児童を前に挨拶をした。式が終わると一度職員室へ戻り、出席簿を持って三年松組の教室へ行った。しいしくんとした教室へ入ると、黒板に「都築先生」と書いてあった。

「起立」「おはようございます」

と元気のいい明るい声が耳に入った。教壇に立つと六十人の子等の目が一斉に私を見た。

「おはよう。座って。」

と言うと、私も子供たちも落ち着いた。先ず私から自己紹介をした。児童も順番に立って名前を言って授業が始まった。今日は一時間で学級の目標と児童は自分のことを発表して終わった。今日は部落毎（一年から六年）に下校する。私は一番若くて元気が良いので、学区で一番遠い一里山の担当である。緊張しっぱなしの午前であった。伯母さんの手作り弁当を食べ、午前一時から職員会である。引き続き学年会があり、五時半頃やっと解放された。帰ろうとすると、お母さんのような先生が

「もう帰るの」

と言われた。

「あのね、先生というのは、勤務時間はないの。今日教えたこと、子ども一人一人の朝からの様子を思い出し、まず日記に書くこと。作品の整理をして明日の授業案を書くこと、それを主任の所へ出して一日が終わるのだよ。」

と教えられた。

毎日帰りは八時頃になる。校長先生は待っていてくださり、

「都築さん、一緒に帰りましょう。」

と言って毎日下宿まで送ってくださった。優しい素敵な校長先生で、幸せだった。

担任の先生は明治三十八年生まれの人で、時々、授業中に見てくれ、いろいろな事を教えてくれた。七月までは教生扱いで

「教育ながらというのは児童に教え乍、ながら教えてもらうものだよ。」



とか叱り方、褒め方まで教えてくれた。素敵な先輩の先生だった。職員は兄と同じような男先生、親のような女の先生、校長、教頭を入れて三十人。女の先生は私を入れて六人であった。

### 三、空襲と終戦

男の先生に赤紙が来て、次々と出征していく。都市からは疎開の児童が来て、あつという間に一クラス九十人になる。先生の通る机間もなく、教室内はぎっしり机が置かれている。十七歳の若い女子先生は目の回る程忙しい。その上毎日空襲警報のサイレンで用具を片付け下校する。一里山まで送り、帰る頃は頭上はアメリカの飛行機が飛んでいる。

六月の麦畑に。パタツと寝転び息を止め、死んだ様になっていた。艦載機に狙われ、機銃射撃を受けた。飛行機が低空して来たときに見えた機内のアメリカ兵の顔は忘れられない。やがて飛行機は去って行き、空襲警報解除。やっと学校に着くと、先生方は防空壕の中から大切な書類を出していた。

「生きて帰れ、よかった。」

と皆が心配してくれた。教室へ行くと機関銃の弾が窓ガラスを通り抜け、黒板をかすって窓を抜け、廊下の外壁を通り抜け、中庭の防空壕の入り口で破裂していた。もし教室に居るなら頭を突き抜け、一発で死んでいただろう。入り口の穴は一センチくらい、廊下の壁穴は二十センチくらいであった。身震いのする風景であった。この頃になると、宿直は男二人、女二人で校舎の番をした。

八月十五日正午、太陽がガラガラ照りつける中、運動場に座り玉音放送を聴く。天皇の声で苦しかった戦争が終わった。しばらく全身の力が抜け、動くことも考えることもできず、ただ涙が出るばかりであった。次の日から教科書を墨で黒く塗りつぶしたり、焼き払

ったりした。ある熱心な先生は、立ち直る事できず心を痛め悩み、退職していった人もいた。

#### 四、新教育発足（昭和二十年九月）

戦争色の教科書に墨を塗って削ったので真っ黒な教科書になり、読みづらく教えにくくなった。子ども達の「なぜ」「どうして」

の質問にも答えられず困惑の授業であった。半年経ち、皆が元気を取り戻したころ、新聞紙のようなガリ版刷りの紙が届き、先生も子供たちも黙々と、折り曲げて切り離しページを揃えて留め金で綴じて、自分たちの手で教科書を製本した。机の上で勉強が始まったのは十月からだ。児童と一つになって、若い私は社会をまつすぐに見て学習に励んだ。

一年間、印刷の教科書を使い、昭和二十四年から真新しい教科書を選考し、使うようになる。地域により教科書は違っていた。転校するときに教科書の事務に手間取ったものである。

#### 五、戦争孤児と食糧難（昭和二十二年～二十四年）

戦争で親を亡くした子供が知立の町にも多くいた。中には、母親も生活苦で子供だけ残して亡くなった家庭もあった。配給米は一人分が月に三合、小麦粉一キロ、あとは豆粕やのさつま芋を切って乾燥させたものくらいであった。私のクラスに早川という三年生の女

の子がいた。毎日、昼食時になると下駄箱の隅にしゃがみ込んで青黒い顔をしていた。私は伯母の作ってくれた麦御飯と野菜と梅干の弁当を持って、下駄箱の少女と一緒に昼食をとった。私の弁当をその子に食べさせてあげた。女の子は半べそ顔でガツガツ食べた。そのうち、五年生になるその子のお姉さんも着て、一緒に食べた。こうして私は毎日昼御飯は食べる事ができなかった。半年もすると、校長先生が子供たちの様子を見廻ったときに見つかってしまった。

「都築さん、自分は？」

「朝、しっかり食べているから大丈夫です」

「他の子に見つかったらどうする？ 皆に食べさせるようになる可能性が出たら、本当の教育ができなくなる。何らかの方法を考えようではないか」

そして、役場へ行ったりしてその子たちは大高の「緑の家」へ転入させることになった。児童相談所の人と一緒に姉妹を連れて入居手続きをした。

この子たちのことがきっかけになり、昭和二十二年十月から学校給食が始まった。最初は各家庭から父兄が持ち寄りでの給食であったが、どの子も平等に元気になって行き、教師の指導も楽になった。この時ほど、努力と話し合いのできる教師になれたことを嬉しく力強く思った事はなかった。父の反対にもくじけずに実行してきてよかった。以後、昭和二十五年にはパン給食になり、脱脂粉乳が配給され、子供たちはすくすくと育っていった。

私は、「タドン先生」とか「姉さん先生」とか「お母さん先生」などいろいろなあだ名で呼ばれ、いつも子供たちと一緒に過ごした。父兄からも信頼され、子供からも親しまれ、いろいろな行事を行った。

## 六、社会科学習指定校となる（昭和二十四年～二十五年）

研究主任はベテランの鳥居敬一先生（刈中で私の兄と同級生）だった。私はまだ教師になって四年目の新米だったにもかかわらず、発表者に選ばれば、壇上で研究発表を行うことになった。毎日、指導過程を記録して授業に取り入れ、夜遅くまで会議をし、実践した。個人指導（ガイダンス）の分科会の主任となり、研究・実践の二年間が続いた。

いよいよ発表会の日が来た（昭和二十五年二月二十四日）。講堂は、県内の小学校の先生方で満席だった。来賓席には、県の教育委員会や教育センターの方々も大勢いる中、二十三歳の若い新米女子教員が、少し緊張して三十分間の講演をした。大拍手を受けた。午各教室に分かれて協議会を行った。長い一日が無事に終わり、私は一躍県内の学校に名を轟かせた。それ以後、「知立小の都築先生」を知る人が多くなり、私は益々教育にまい進した。

## 七、戦後初めての修学旅行

行き先をそれぞれの学校で決める事になった。伊勢神宮は取り止めになり、西三河の学校のほとんどは、「奈良・京都」と決まる。乗り物は自由に使えず、最初は船で行った。子供たちも先生も船（漁船）に乗ったことがないので、誰もかも船酔いをした。私だけへ行きだつた。幼少の頃毎日船に乗って太平洋上を走り回っていたお陰である。私は洗面器を持って船酔いした先生や子供たちの世話をした。皆から「何でもできるすごい先生」とあがめられた。

## 八、夏休み返上

昭和二十五年、学校にプールができた。オリンピック金メダリストの前畑秀子選手を招き、柿落<sup>こけら</sup>としをした。碧海郡の体育主任も来賓として来ていた。この時、水泳のできる先生は、私ただ一人だったので、前畑選手の弟子がクロール、私が平泳ぎをすることになった。

その後、各学校から水泳のコーチをしてくださいと頼まれ、主任の田中礼蔵先生（兄の親友）と二人で、夏休み中、土日もなく毎日各学校を訪問して、教師の水泳指導員を勤めた。

私は、社会科の発表会と水泳指導で、碧海になくはならない好適な女教師となった。

## 九、いろいろな行事

碧海郡で選抜され、全国文化集会（国語）に、会費として一人 米二升を持って出席した。帰ってから「国語研究会」を開設。後藤善平校長を会長とし、渡辺黄一校長、神谷、浅井、私の五人で授業後、岡崎師範学校の教育会館で毎日午後五時から九時まで国語の副読本の研究をし、作製し、碧海郡の全小学校へ配布した。国語の副読本「ことばのきまり」である。

新舞子海水浴場での海の学校指導、ガイドダンス、特別知能障害児指導、普通学級の中で行う個別指導、郡の指定を受け、発表会を行った。この時の父兄とは今も文通をしている。

十、矢作東小学校 （昭和二十八年四月～三十五年三月）

知立小学校の新校長平岩先生とは性格的にも合わず、年齢順・男女の差など封建的で指導方針も対立ばかりしていた。そんな中、矢作東小学校の川村校長が「私の学校へ転任しておいで」と誘ってくださったので、学校を変える事になった。一番腕白な学級「松組」の担任になる。戦後から立ち直り生活も落ち着き、完全に復興への第一歩を踏み出した。「先生のためならエンヤコラ」と、まとまりの良い学級になった。

## 七、結婚

ある日、

「ただいま、腹ペコだよ」

と家に駆け込むと、母が

「シート！ もっと女の子らしく帰って来たなら？」  
と言う。

「なんでえ？ 本当なもの。」

「お客さんだよ。」

「あっそう。」

部屋に入ると、父の従兄である鈴吉という伯父さんがいた。

「相変わらず元気がいいなあ、家へ嫁に来ないか」

と、いきなり言われたのでびっくりした。九月のことである。運動会の練習の真っ最中で、私は真っ黒な顔をしていた。

「丈夫そうで明るい娘で、家にはもってこいの人物だ」

と言って、いろいろな話をして帰って行かれた。それから毎日家に来て、学校から帰って来る私を待っていた。

「まあ 決めたか」

「まだ。」

こんな日が一ヶ月半続いた。十月の終わりごろ親子三人で来て、見合いをさせられた。相手の男性は、痩せていて青白い顔をした小柄な、大人しそうな美男子だった。親の横で静かに座っていた。なんと弱々しい無口な人だろうと思った。何も話さず見合いは終わった。まるで私とは正反対であった。

十月末、婚約成立。結婚後の生活などいろいろ話合った。

私は、「結婚後も親が健康でいるうちは、学校の先生を続けさせてほしい」と言う希望を出した。相手の親は、

- ・ 一家に主婦は一人の方が平和に暮らせるから、家庭の事は自分たちがする。
- ・ 子供が生まれたら、自分たちが育てる。
- ・ あなたは克己の世話と、学校のいろいろな事の面倒を見てくれれば、家の事はしなくてよい。
- ・ 結婚式は知立神社で十二月二十六日とする。

という約束事をした。話が終わると二家族で会食をし、酒を酌み交わした。結婚式まで二ヶ月であった。

初めてのデートは十一月三日、名古屋城で大輪菊、菊人形を見て何事もなく一日を楽しく過ごした。その後、日曜日毎のデートは先方の家で、児童の知能検査やテストの採点、図画の五段階分けなどの学校の仕事を手伝った。仕事が終わると夕食をご馳走になり、自転車で私の家まで送ってくれた。

そして冬休みになり、二十六日に結婚式。魚茂料亭で宴会をした。タクシーで洗濯板のような知立街道（今の一五五号線）をガタガタゆられ、婚家に着いた。姑に連れられた花嫁姿の私は、隣まわりをし、挨拶をした。やっと一日が終わった。



## 編集後記

この自叙伝は、平成二十一年六月二十三日～八月十二日、前立腺癌の治療のため入院中に父が書き始めたことがきっかけで、母も書き始めましたが、

「あまり早く書いてしまうと早く死ぬといかんで、ゆっくり書くわ！」

と言い、結婚したところまで書いたものを一字一句改ざんすることなく編集したものです。

その後の記事は、亡くなる三ヶ月ほど前から病床の母に口頭で伝えてもらったことを「参考資料」として作成しました。写真は、撮影時期のわからないものもありますが、母の記録として最後に掲載しました。

また、参考資料を作成するにあたり、豊田市竹元町の光恩寺住職様には資料提供していただいたことをここでお礼申し上げます。

母は、「病歴」の欄にあるとおり、平成十一年から肝臓を煩いましたが、主治医のアドヴァイス通り、食事に気を付け、毎日の生活をきちんと記録し、元気に暮らしていました。

平成十七年頃から、膝の関節の痛みのため歩行困難になり、外出は控え、日々の買い物は父が一人でこなしていました。

平成二十二年二月二十五日、父が前立腺癌のため亡くなったあとは、父や私の祖父母、私たち兄妹、そして孫たちとの思い出がいっぱい詰まった豊田市本町の自宅で、頑張って一人暮らしをしていました。持たせてあげた携帯電話の電話機能もしっかり使いこなし、よく電話で話したりもしました。大好きな「漢字パズル」も、とても難しいところまでやって楽しんでいました。

二ヶ月に一度のトヨタ記念病院への通院や、月に二〜三回の買い物、その他の用事などは、娘の私と孫の貴彦・優実が、父の愛車だったポルテに車椅子を積み、連れて行っていました。また、週に3日程、母の妹・千絵さんの旦那様、中根さんが、手作りのおいしいおかずを持って来てくれました。

竹村小学校勤務時代の同僚の杓名八重子先生も、時々買い物代行してくれたり、隣組の方々にも、ゴミ出しなど日々の生活のお手伝いをしていただいたりしていましたので、いつも周りの方々の優しさに感謝していました。

平成二十五年七月の検査で、とうとう肝臓に癌が見つかり、抗がん剤を飲み始めましたが、皮膚の発疹や食欲減退などの副作用が強く、二週間で中止しました。しかし、食事が十分に取れなくなり、体力が落ちていたのでしよう。

平成二十五年八月二十四日、私が名古屋で行うコンサートを聴きに行きたいということでしたので、貴彦が迎えに行くと、家の中で倒れたまま動けなくなっていました。

すぐに救急車でトヨタ記念病院へ運ばれ、そのまま入院となりました。もし私が音楽の道に進んでいなかったら・・・幼いころから両親にピアノを習わせてもらっていたおかげでめぐり巡ってこの日、母は無事でいられたのだと思います。母はここでも私に、自分の信じた道を一生懸命やっていたらいつか人の役に立つことができ、人の命さえも救うことができるのだということを、身をもって教えてくれたのです。



愛車「ポルテ」

奇しくも、その翌日には、私が平成十四年から毎月行っているボランテイアコンサート「ハートフルコンサート」の日であり、偶然にもプログラムしていた母の大好きな「我は海の子」「川の流れるように」など演奏すると、病床で楽しそうに口ずさんでくれました。九月のコンサートでは、母の好きな曲をたくさん弾き、聴いてもらうことができました。

二ヶ月後の十月二十二日、さくら病院へ転院しました。点滴だけの栄養補給だったので、少しでも口から食べさせてあげたいと思い、ほぼ毎日お粥や煮物、プリン、ヨーグルトなどを持って行き、食べさせてあげていました。

兄・茂樹も日本に滞在中は毎日病院へ通い、食べさせてあげていました。中根さん、甥の磯村誠さん、沓名先生、隣組の久野さんも、たびたびお見舞いに来てくださいました。

十二月十一日には満八十五歳の誕生日を迎え、大好きなアップルパイを食べました。

平成二十六年の元旦には、

「やっぱり正月だで、お餅が食べたい」

と言う母に、お雑煮を作って持って行き、米粒くらいにちぎって食べさせてあげると、

「ああ、おいしい、おいしい」

と笑顔で言いながら全部食べました。(切り餅半分)

一月七日の鏡開きの日には、七草粥を持って行くと、これもまた

「おいしいねえ」

2013年9月25日(日)AM11:00-12:00  
**プログラム**  
 真実・丹波あゆみ/五十嵐節子/大瀧幸子

1	(ピアノ)トビ	みどれみ〜優海	作曲: 内田 大由
2	(ピアノ)トビ	ムーンリバー	作曲: 内田 大由
3	(ピアノ)トビ	愛の嵐	作曲: 内田 大由
4	(ピアノ)トビ	星の鼓動	作曲: 内田 大由
5	(ピアノ)トビ	エトピリカ	作曲: 内田 大由
6	(ピアノ)トビ	生のごえい	作曲: 内田 大由
7	(ピアノ)トビ	つぎ	作曲: 内田 大由
8	(ピアノ)トビ	君をのせて	作曲: 内田 大由
9	(ピアノ)トビ	スリーニ〜河	作曲: 内田 大由
10	(ピアノ)トビ	花は咲く	作曲: 内田 大由
11	(ピアノ)トビ	めくり返り	作曲: 内田 大由
12	(ピアノ)トビ	私にできること	作曲: 内田 大由

2013年9月

2013年8月18日(日)AM11:00-12:00  
**プログラム**  
 真実・丹波あゆみ/五十嵐節子/大瀧幸子

1	(ピアノ)トビ	みどれみ〜優海	作曲: 内田 大由
2	(ピアノ)トビ	innocent	作曲: 内田 大由
3	(ピアノ)トビ	愛の嵐	作曲: 内田 大由
4	(ピアノ)トビ	知恵の嵐	作曲: 内田 大由
5	(ピアノ)トビ	赤とんぼ	作曲: 内田 大由
6	(ピアノ)トビ	夏の思い出	作曲: 内田 大由
7	(ピアノ)トビ	我は海の子	作曲: 内田 大由
8	(ピアノ)トビ	赤とんぼ	作曲: 内田 大由
9	(ピアノ)トビ	涙の歌	作曲: 内田 大由
10	(ピアノ)トビ	めぐり返り	作曲: 内田 大由
11	(ピアノ)トビ	私にできること	作曲: 内田 大由

2013年8月

と、にこにこ笑顔で、全部食べてくれました。(〇飯茶碗半分くらい)

亡くなる前日の一月二十四日も、兄がヨーグルトを二～三口、食べさせてあげたそうです。その日、兄が帰った直後、私が病室へ行くのと、大きな声で返事をしてくれましたが、とても苦しそうにしていました。

そしてその翌日、平成二十六年一月二十五日(土)午前五時五十分、長男・茂樹夫妻に見取られ、苦しむことなく自分でそつと目を閉じ、その生涯を終えました。幸せな最期だったと思います。

一月二十六日は私の誕生日でした。そして、トヨタ記念病院のボランティアコンサート「ハートフルコンサート」でした。

一月二十四日の夕方、私が帰った後から具合が悪くなり、二十五日午前一時ごろ、病院から電話があり、すぐに駆けつけました。そして二十六日のコンサートは中止にしようかどうかと悩んでいました。

そんな私にきつと母が言いたかったことは、

**「自分でやると決めたことは、何があろうとやり通さない！」**

ということだったと思います。だから、母は、一月二十五日に、苦しむこともなく、眠るように静かに息を引き取り、奇しくも、予定していた斎場の都合で、通夜は一月二十七日、告別式は二十八日になったのです。

母は最後に私に、「音楽で人の役に立つ仕事のプレゼント」をくれたのだと思います。

コンサートで私が弾く曲の中で、母がよく病床で口ずさんでいた「花が咲く」があり、本当に泣けそうになりました。「私にできること」という歌を歌う時も、

「本当に私は、『私にできること』をしてあげられたのかな？」

と思いつながら歌い、「めぐり逢い」を弾いている時には、父の亡くなる前日に、同じ病棟で行ったコンサートのことも思い出し、涙が出そうになりました。しかし、

「みくちゃん、何やっとなるだん、泣かんでしつかり弾かなかんよ！」

という母の声が聞こえてきたので、聴いてくださる患者様と一緒に演奏する仲間には決して悟られず、悲しい気持ちも頑張る気持ちも全部、ピアノの音に込めて、頑張つて弾ききることができました。

少し話はそれますが、半年あまり、ピアノレッスンを休止中だった生徒さんが、今日が私の誕生日だからということで、コンサートを聴きに来てくださり、来月からレッスンを再開したいと言ってくれました。綺麗なお花もいただきましたが、何よりもレッスン再開とまた一緒にハートフルコンサートもやっていけるといえるということが私にとっては一番の素敵なプレゼントだと思いました。

そんな素敵なプレゼントをいただけたのも、母の

「中止せずにやりなさい」

という意志があったからこそです。母の友人・知人に訃報を知らせた時、誰もが口を揃え、

「とても良い先生だった、何をおいでも、仕事を、教え子たちをととても大切にするととても尊敬する先生だった」

とおっしゃってくださいました。八十五年間の生涯、四十年余り教師生活をしてきた両親の背中を見て育ち、言葉で教えてもらったことを、私はこれから決して忘れず、ピアノや音楽を通じて、たくさんの人に伝えていきたいと思えます。

母の遺影は、父と同じく「金婚式」の際、豊田市の式典で撮っていただいたものを使用しました。父と母が仲良く並んで映っているその写真を見て、私は、この人たちの子どもとしてこの世に生まれてきて本当に良かったと心から思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

二月一日は、入院中の母を励ます意味も込めて予定していた貴彦の結婚式でした。一時は中止ということも考えましたが、自分のせいで可愛い初孫の結婚式が中止になることは、決して母の意志ではない、あえて予定通り行うことで母もそして父も喜ぶであろうとのことから、式を行いました。

会場の親族席に、この「金婚式」の写真を掲げました。二人の声が「貴ちゃんよかったねえ、幸せになりんよ（なりなさいよ）」と、聴こえてくるようでした。

（一部、「丹羽ピアノ教室」ホームページ内の日記より引用）

平成二十六年二月二十五日 長女 丹羽みどり



平成 18 年(2006 年)9 月 金婚式

## 「追記」

平成二十五年五月、私はこの母の自叙伝及び、父の自叙伝を印刷製本し、母の兄である都築幸男様、弟の都築基雄様、妹のご主人の中根逸也様に郵送しました。都築基雄様よりお返事をいただき、母の記憶違いで、間違っている箇所があったとのことで、修正しました。

また、以下の文章もいただきましたので、追記とさせていただきます。

平成二十五年五月二六日

丹羽みどり

## 「都築基雄様より補足」

### 六、新任女教師誕生

富士松村今川の八百屋の伯父さんの家。ここの伯母さんは、母の姉。この家に、大正一四年生まれの姉(喜久代)が一室を借りて下宿していた。姉は富士松南小学校の教師。そこへ伊佐子が転がり込んだわけだ。

その後、少し離れた富士松村今岡の伯母さん(父の姉)の家の離れの一室を借りて下宿をした。

この頃、伊佐子はよく姉に慰められたり、教えてもらったり、面倒を見てもらっていた。伊佐子は姉を「喜久ちゃん」と呼び、姉は伊佐子を「伊佐ちゃん」と呼んで、仲良しの姉妹であった。

私(基雄)は大学の学生るとき父が死んで、それまで学費は父に頼りきっていたが、父の死後はアルバイト(中学校の講師)をしたが、学費の半分は二人の姉と兄に助けてもらっていた。姉と兄が結婚してからは、伊佐子一人が学費を助けてくれた。いい姉でしたよ。